

週日の説教

金 大烈 神父 2010年8月19日(木)

《悔改めへの招き - 正しく生きて、幸せを感じましょう - 》

司祭の仕事の一つは、赦しの部屋を守ることです。そこで告解する人々の話を聞いて、適当な償いを与え、罪を赦す祈りの文章を読みます。何回も申し上げたことがあるのですが、司祭の仕事の中で一番疲れるのは、この告解部屋で人の話を聞く仕事です。それは一番つらい仕事です。何回説教するよりも疲れます。罪特有の性質なのかもしれませんが、ほとんどの罪の内容は、人の心を痛めるものです。しかしたまには、告解部屋に座っていて、ものすごく感動することもあります。そしてまた、本当に悲しい気持ちになる時もあります。それは、その人の罪の大きさとは関係ありません。「この人は、本当に心を痛めながら真面目に悔い改めている。」と感じられれば、そこに座っている司祭の心は感動そのものです。しかし、いろいろな罪を並べて、赦しを求めても、「本当の悔い改めの気持ちになっていない告解だ。」と感じたら、それを赦しながらも悲しい気持ちになります。

今日の福音(マタイ 22・1 - 14)では、王が、王子の婚宴にたくさん人々を招きましたね。しかしその人々は、いろいろな言い訳をして断りました。中には王の使いを殺してしまった人もいました。その話しを聞いた王は、「軍隊を送って、この人殺しどもを滅ぼし、その町を焼き払った。」と書かれていますね。この福音がたとえている『招き』の意味は何だと思えますか。いろいろな意味はありますが、今日、皆様と一緒に考えたいのは、「悔い改める機会への『招き』」です。

面白いことは、司祭の目で見えて一生懸命に信仰の生活をしているように見える人ほど、よく告解部屋に入り、いろいろな罪の告解をします。誰が見ても“この人は立派な信仰の生活をしている”と思うのに「私は本当に罪人です。」とおっしゃいます。逆に、“信仰的に少し変わってほしい”と思う人に限って、「告解する内容はありません。生きること自体が罪ではありませんか。」と気軽な告解をします。

皆様、ここに隠れている真理があります。神様との関わりが上手く行けば、自分がどのくらい神様に逆らったか、罪を犯したか、が明確に見えてきます。頭で信仰の生活をする人は、自分の罪を認めません。自分の弱さを認めません。しかし、心で信仰の意味を分かっている人は、毎日毎日感謝をします。こんなに間違えているのに、いつも自分のことを考えてくださる神様に対しての感謝の心です。

皆様、一回きりの人生かもしれません。しかし、その中で一度でも正しいと思われる生き方をしましょう。頭で生きることより心で生きようとしましょう。そうでなければ私達の時間は無駄になります。私達の努力も無駄になります。

今日の福音に戻りますが、結局、王はこのように命令しました。「招いておいた人々は、ふさわしくなかった。だから、町の大通りに出て、見かけた者はだれでも婚宴に連れて来なさい。」と。これはどういう意味でしょうか。私達は、招かれた人になるのでしょうか。それとも、招かれた人々がふ

さわしくなかったので、町の大通りから連れてきた人になるのでしょうか。実は、それは大事なことでないのです。大事なのは、「どのような形であっても、与えられている正しく生きるための機会・チャンスを自分の利己心によって拒んでいないか」ということなのです。それを振り返ってみましょう。

私達の生きる意味はただ一つです。それは、正しく生き、そこから幸せを感じることです。そして、その結果永遠の命が与えられると確信することです。

皆様、毎日、毎瞬間、私達は招かれていると思います。その招きにふさわしい答えができるように頑張りましょう。それが、私達が最後までやりとげなければならない宿題だと思います。

ありがとうございました。